

平成 21 年 5 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2005～2008

課題番号：17530432

研究課題名（和文） ストレngths視点の構造の研究

研究課題名（英文） A Study of the Structure of a Strength-Perspective

研究代表者

田中 千枝子 (TANAKA CHIEKO)

日本福祉大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：40276861

研究成果の概要：以下4つの研究課題によって、ソーシャルワークにとって重要な視点である「ストレngths」の構成要素を抽出し、測り、解決に役立てる方法論を確立した。まず内的資源「個人家族」「集団」「地域」と外部資源「物理」「社会相互作用」「組織制度」「社会政治」のマトリックスで当事者インタビューデータを分析した。次に尺度として5領域30項目を抽出し、さらに探索的因子分析によって①情や関心 ②関係性の利用 ③状況認識と自分の力量評価の兼ね合い ④資源の触発・動員の戦略 ⑤自分の価値観・生き方 ⑥心頼みとするものに再分類された。三番目にその尺度を使って、ストレngths視点のアセスメントを当事者と協働で話し合いの上作っていく、危険と安全を描き分けるサインズオブセーフティの様式を援用してアセスメント手法およびツールを開発した。最後にミュンヘンで行われた IFSW 学会総会およびオーストラリアのパーズにてストレngthスペースのアセスメント実践を討論および見学し、日本での実践の展開に関する課題や考察を行った。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	600,000	0	600,000
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	2,500,000	360,000	2,860,000

研究分野：保健医療福祉

科研費の分科・細目：社会学（社会福祉学）

キーワード：ストレngths視点 アセスメント 協働 尺度開発 エンパワメント

1. 研究開始当初の背景

社会構成主義やブリーフセラピー、ナラティブなど、当事者主体のソーシャルワークのパラダイム変換が進む中で、ストレngthスペースのソーシャルワークは、その重要性をますます増してきた。しかし従来理念や理論では言われてきたことだが、実践上ではその視点を組み込むために、具体的な技術や技法ツールといったものによるサービスの均質化を図ることが必要であった。その正否はジェ

ネラリストソーシャルワークの日本における定着化に影響すると考えられていた。

2. 研究の目的

(1) ストレngthスペースのソーシャルワークにおける当事者とソーシャルワーカーとの協働アセスメントのために必要な、アセスメント項目を抽出すること

(2) ストレngths視点のアセスメント尺度

を開発すること

(3) アセスメント項目を使って、具体的な事例でストレングスを引き出す協働面接が行えるような、アセスメントツールを開発する。

(4) ストレングスペースのアセスメントの方法論について、他の国の実践と比較すること

3. 研究の方法

(1) アセスメント項目を抽出するために、KempとWhittakerによる環境アセスメントとRappの内部環境概念の枠組みを参考に、当事者（認知症者をケアする家族）インタビューを質的に分析した。それによって該当しにくい項目は概念を新たに生成した。それによってストレングス視点の構成概念の再検討を行った。

(2) (1) で得たアセスメント項目をもとに、3名の中堅ソーシャルワーカーの参加を得て、ブレインストーミングによる質問肢に落とす作業を行った。そして作成した質問肢を5名のソーシャルワーカーに依頼し、30例の認知症患者家族に対し、質問内容および選択肢当事者への質問に落とす形で、プロテストを行い、内的一貫性を確認した。結果5領域30項目の選択肢を作成し、124名の量的調査を行い、探索的因子分析を行った。

(3) (2) で開発したアセスメント尺度と質問項目を組み込んだ、当事者とソーシャルワーカーの協働アセスメントツールとしてのシートを開発した。その使用方法を普及するために、全国各地で講習会を開催して、現場のソーシャルワーカーに理解してもらい、その実際の使用感を確認し改善した。

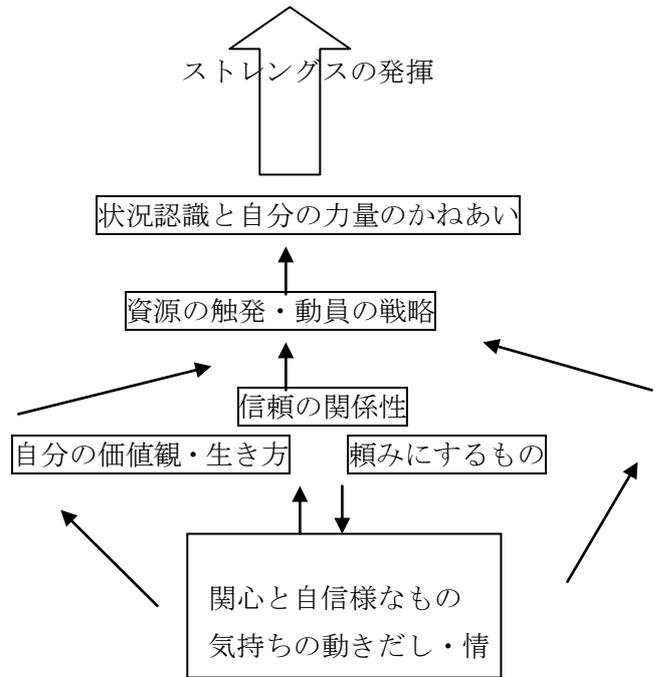
(4) (3) で開発したアセスメントシートによる実践を広めながら、ミュンヘンのIFSW総会学会に参加し、またオーストラリアパースの児童保護領域の実践を見学し、世界のソーシャルワーク実践との比較で、本ツールを再度検討した。

4. 研究成果

(1) KempとWhittakerの環境アセスメントの項目とRappの内部環境の項目を加え、人と環境のマトリックスを作った。環境を物理的・社会相互作用的・組織制度的、社会政治文化の横軸にとった。内部環境をRappによる熱望・コンピテンシー、自信の3要素に分け、さらにインタビューデータからそれに

当たらない「義務感から」「熱意にほだされて」「～に免じて」「やるしかないから」などのバリエーションから、レジリエンシー（心の動き出し）という概念を生成した。結果マトリックス形式で、領域を区切ったストレングスアセスメント領域モデル（個人・家族版）を作成した。またインタビューデータによって作図した。

図1 ストレングスの構造



(2) ブレインストーミングとプリテストを通じて、5領域30項目のストレングス評価項目に関して、調査協力を了承した10名のソーシャルワーカーに各20事例の認知症患者家族への施行を依頼し、結果124例のデータを収集し、探索的因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。結果6因子23項目が抽出され、①情や関心 ②関係の信頼性 ③状況認識と自分の力量との兼ね合い ④資源の触発・動員の戦略 ⑤自分の価値観・生き方 ⑥頼みにするもの と命名した。そして①全くそうである ②少しそうである ③あまりそうではない ④全くそうではない の4件法で、その内容を記載しながら、記入していった。（表1）

(3) (2) で作成したアセスメント尺度を面接時の協働アセスメントの質問肢として、さらにその答えを、安全と危険に書き分ける形で、アセスメントシートを作成し、プリテストおよび施行に当たっての使用説明会などを各地で行い、その使用感を集めた。結果、ストレングスペースの質問がうまく入れば、新たな部分の情報が入って来やすくなること、マッピングやスケーリングや表を使

かって目で見てわかりやすく、協働で作業をする過程が、当事者との一体感を強化することなど、評価は高かった。さらにその普及に向けて各地での説明会を精力的に行った。

表-1 アセスメント尺度 質問項目

<p>① 情や関心</p> <p>「自身の気持ちや体調は、すでに解決に向けて動き始めていますか」</p> <p>「解決に向けて自身の特別な決意や決心はありますか」</p> <p>「物理的な支援環境を整えるのに、独自のポリシーを持っていますか」</p> <p>② 関係の信頼性</p> <p>「解決していくご自身を、信頼してくれると思える人はいますか」</p> <p>「解決に当たって、ご自身が信頼できると思える人はいますか」</p> <p>③ 状況認識と自分の力量の兼ね合い</p> <p>「ご自身の行動の仕方や身の処し方は、解決に向けて役立ちそうですか」</p> <p>「解決に役立ちそうな知識や技術の心当たりは」</p> <p>③ 資源の触発・動員の戦略</p> <p>「物理的な支援環境を整える経験を、今までもしてきた実績がありますか」</p> <p>「物理的な支援環境を整える手立てを持っていますか」</p> <p>「社会的相互作用を促進する手立てを持っていますか」</p> <p>「組織や制度との関係に対して、独自の考えに基づく行動をとりますか」</p> <p>「組織や制度に対する手立てを持っていますか」</p> <p>「社会政治文化的環境を整える手立てを持っているか」</p> <p>⑤ 自分の価値観・生き方</p> <p>「自身のもっている信条や価値観は、解決に役立ちそうですか」</p> <p>「根拠は強いて無くても『なんとかなるさ』という感覚はありますか」</p> <p>「支援環境が不良でも、『ものは考えよう』とする考えはありますか」</p> <p>「社会的相互関係が不良でも、『ものは考えよう』とする考えはありますか」</p>

「組織や制度との関係に対する独自のポリシーを持っていますか」

⑥ 頼みにするもの

「ご自身の性格や才能は、解決に向けて役立つか」

「過去の経験の中で、今回の解決に役立つか」

「組織や制度との関係を持つ経験をしてきましたか」

「組織・制度が不良でも、『ものは考えよう』とする考えはありますか」

「社会政治文化等の環境が整わずとも、『ものは考えよう』とする考えはありますか」

(4) (3) で作成したアセスメントシートとインタビュー方法、およびマッピングなどについて、世界でどのような実践があるのかについて、07年ミュンヘンで行われた I F S W の総会学会に出席して、とくにアメリカ・オーストラリアのソーシャルワーカーたちと意見交換を行い、08年オーストラリアパースにある、解決志向型アプローチの1つサインズオブセイフティの実践の現在を学びに行った。そして日本での導入の問題点を中心に報告会および検討会を実施した。その論議の焦点は、日本の MSW の技術性と理念の乖離であった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

① 田中千枝子 「ソーシャルワークと権利擁護」『社会福祉学』48 巻第4号印刷中 2008 無

② 田中千枝子 「虐待者との協働 サインズオブセイフティー アプローチ」『介護支援専門員』PP36-48 2007 無

[学会発表] (計 5 件)

① 田中千枝子 「ストレングスペースのソーシャルワーク実践～アセスメントシートの開発」日本医療社会福祉学会、同志社大学 2008

② 田中千枝子、菱川愛 「協働アセスメントツールの開発～サインズオブセイフティーアプローチ」日本社会福祉実践理論学会、関西学院大学、2008

- ③ 田中千枝子 「ソーシャルワークと人権擁護」『日本社会福祉学会シンポジウム』岡山県立大学、200 田中千枝子、菱川愛
- ④ 田中千枝子 「ストレングス視点の構造～アセスメントスケールの開発」 日本社会福祉学会、大阪市立大学 2007
- ⑤ 田中千枝子、菱川愛 「ストレングスの構造～当事者インタビューによる質的分析」日本社会福祉実践理論学会、大妻女子大学 2007

[図書] (計 2 件)

- ① 田中千枝子、菱川愛 厚生労働科学研究費補助金事業 「ストレングス視点の構造」報告書 2004年～2008年 印刷中
- ② 大谷昭、田中千枝子編著「改訂 医療ソーシャルワーク実践 50例」pp6-29 pp65-204 川島書店 2008

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 千枝子 (TANAKA CHIEKO)
日本福祉大学・社会福祉学部・教授
研究者番号：40276861

(2) 分担研究者 菱川 愛 (HISHIKAWA AI)

東海大学・健康科学部・講師
研究者番号：30338769
(H17～19年度)

(3) 連携研究者 菱川 愛 (HISHIKAWA AI)

東海大学・健康科学部・講師
研究者番号：30338769
(H20年度)